

東京大学文学部言語文化学科

ドイツ語ドイツ文学科研究室

Germanistisches Seminar an der Universität Tokyo



目次

独文科について.....	2
進振りについて.....	3
先生&授業紹介.....	5
時間割.....	8
ドイツ留学体験記.....	11
独文科による作品&勉強メモ.....	15

独文科について

独文とはドイツ語学及びドイツ文学を専門にしている学科です。

今年度も学生・院生が新たに入学・進学し、30人が本郷の緑の中で学び、語らっています。独文に足を踏み入れた理由は、「ゲーテが!」「カフカが!」「ドイツ語が!」「何となく!」などなど、みんなそれぞれ異なりますが、ドイツ語という言葉を経験に含めて括れる私達です。第2外国語がドイツ語だったから、という理由だけでも独文へ飛び込む資格は十分です。ドイツ語を読んで暮らす人たちの集まりですから。

さて、ドイツ語・ドイツ文学と言ってもたいへんに広いわけですが、先生方の担当ということでドイツ中世文学、ドイツ近現代文学、ドイツ言語学と三つに分けられます。院生も含め、半数程度が近現代文学を専門とし、残りの半数が半分ずつ中世文学と言語学を専門に選ぶというような具合になっています。近現代に人が集まるのは、やはり名立たる作家・作品が数多いからでしょう。そして、眼を見開かれるような理論に出会える研究対象でもあると思います。中世文学にも『ニーベルンゲンの歌』などを頂点に面白い作品が多く残されています。古い時代に書かれた言葉や文学に触れるのは、失くしたものの、忘れられたものを探しにいく旅のようです。そして文学から少し距離を置き、ドイツ語を通して言語学の問題に取り組む人たちもいます。外国語学習者ならではの視点で、あまりに身近でありながら神秘に包まれている言語、そのひとつであるドイツ語を対象にして分析することは、意義のあることです。

というのが、独文の本分といったところでしょう。普段は、助教室で、コーヒー、紅茶、緑茶どれにしようかな、と一瞬考えて、いつも通りポットからコーヒーを注いで、お菓子を目移りしながら選んで、ぼんやりと過ごしているような学生もいます。辞書室で自習をしたり、うろうろしたり、みんな思い思いに独文の学生・院生をやっています。私達は、どんな思いを持っているのであっても独文に進学してくださる方々を歓迎いたします。

進振りについて/3 年生より

大体的場合、と言わずとも一年前には筆者も半ばそうだったのですが、文学部に来てしまう人の中には文学部に「進学せざるを得ない」事情を抱えた人というもの少なからず含まれているでしょうか…そして学科選びについて最も頻出なのは就職のときにつぶしがきく、とか今は決めきれないから幅広く何でも学べそうなところ、という感じかもしれませんね。そんな皆さんにはまず一言！ドイツ語が出来なくても独文に来てくれていい、むしろ来て下さいとアピールしたいのです。独文研究室は、その名のイメージとは反対に（！？☆）まさに、皆さんの将来を広げ、土台作りを助けてくれるところなのです。

私自身のことを思い出してみると、専修を独文に決めた明確なきっかけはありません。敢えて言えば入学時の二外がドイツ語だったからという一事に尽きるのですが、決め手になったのは独文の紹介文か何かで目にした「エッセイスト・ニーチェ」という一言であったかと思います。要はドイツ語圏にあったものならなんでも扱ってしまうよ、哲学も史学もないよという自由極まる雰囲気惹かれたのです。来て見ると、オーケストラに入っている人、演劇サークルに入っている人、いろんな人がいます。

駒場で学んでいたときには、文学的な私の興味はむしろフランスにあって、ポール・ヴァレリーにはまり込み、三外でフランス語を学んだりもしていたのですが、どういう訳か独文に進学して平気な顔をしています。色々な言語や作家、漢文なども少しずつ食べ散らかしていると、やはり何かを集中して扱いたい、一つのことを考え抜いてみたいという欲求に…

というようなこともなく、結局はやはり気分で選んでいたような気がします。ドイツ語の得意不得意や卒論や就職等々、気にし始めると「楽なのかどうか」という基準がやはり顔をだすものだと思いますけれども、少なくとも私は、何となく選び、何となく決めるという態度で来て、少しずつながら自分の興味を開拓し活かすことが出来るようになった今、大学生活は楽しく充実し、将来像も自信をもって組み立てることが出来ています。

最後に、進振りの話題ですので一応触れて起きますが、独文に進学するのには学力だ語学力だということを気にする必要はゼロです。先輩の中には独文の大学院進学のほか、専門大学院や公務員、新聞社、芸能？ 方面に進んだ方もいます。

将来や自分自身をめぐる個人的な不安から、地震や原発といった社会的な不安まで。ドイツ語圏の莫大なテキストの中には、ありとあらゆる問題を考えるための手がかりが潜んでいます。一緒に、掘り起こしてはみませんか。知的興奮と、多様に開けた未来が、あなたを独文で待っています。

(2008 年度学部卒)

いつでも人生に前向きで、健全な生活力を持ち、出世を目指し、曇ることのない眼差しで、確固とした目標へ、確固とした足取りで歩ける人には、文学は必要ありません。文学は、現世的になりきれない人たちのために存在します。俗世の生活を愛しながらも、それに調和しきれず、思春期の自意識過剰をいつまでも引きずり、ちょっとしたことで人生を思い悩むせいで、怠惰な生活を送ってはまた後悔し、目標も定まらぬままふらふらと覚束ない足取りでしか歩けない人——そんな人たちに、文学は慰めを与えるのを待っているのです。

よく「働かなくちゃいけないけど、働きたくない」と笑いながら話す人を見ます。そして自分がダメ人間であることを自嘲します。そういう人は単に熱意がないのではなく、ほんとうはより高次のものへの強い憧れをもっているのです。現世の枠内におさまって働く満足感よりも、その枠外から世界を眺める認識のよろこびを、かれらは薄々ながら知っています。しかし完全な世捨て人になることはできないから、社会的出世への未練も、思索と研究への興味も、どちらも切り捨てたくない。その中途半端さと罪悪感が、自分の不適応を責めさせることになるのです。そしてそんな根暗な悩みを持たずに社交的に生きてゆける人々を、憧れをもった遠い眼で見たりするのです。

進路を決めるということには、就職と学問どっちを重視するかという意識がはじめて露骨に顕わになる分かれ道です。働くのも楽しいだろうけど、腰を落着けた研究もしてみたい、どっちが自分に向いているのか、気持ちが固まっていけない人も多いと思います。

独文科の今年の三年生は男三女二の総勢五人で、来た経緯も人それぞれです。人数が少ないぶん一人一人の考えていることが分かる気がして、静かな楽しさがあります。駒場時代の華やかさからいったん身を引いて、コーヒーを飲んだような落ち着いた気分で（実際研究室にコーヒーがあるので、飲みまくっています）しばらく過ごしてみたいと思う人には、興味を持っていいだけの価値がある場所だと思います。

さいごに、健全な生活に生きる人々への憧れを持ち続けた作家、そしてぼくが独文に入るきっかけとなった作家、トーマス・マンの作品『トニオ・クレエゲル』からの引用をします。

「……君はもう「ドン・カルロス」を読んだかね、ハンス・ハンゼン、いつか君の家の庭戸のそばで僕に約束した通りに。読むのはやめたまえ。僕はもうそんなことを君には求めないよ。（…）君は詩と憂愁を凝視して、その明るい眼を曇らせたり、夢のように霞ませたりしてはいけないのだ。……君のようになれば！……もう一度やり直す？しかしそれはなんにもなるまい。やりなおしたところで、またこうなってしまうだろう。いっさいは、今まで起こって来た通りにまたなってしまうだろう。なぜといって、ある人々は必然的に道に迷うのだ。彼等にとっては、もともと本道というものがないのだから。」

（2013 年度進学）

先生 & 授業紹介

駒場では語学などごく一部を除き、多くの授業が講義の形で、30～100 人規模の大きな教室で行われているのに対し、独文の授業は基本的に 5～15 人くらいの規模です。その中には「講義」つまり先生のお話を聞く形の授業もあるにはありますが、大半はいわゆるゼミ形式です。つまり、ドイツ語のテキスト——小説だったり詩だったり論文だったり、古いもの新しいものさまざまですが——を、一語ずつ一文ずつ丁寧に訳し、解釈していくというのが基本の形になります（例外はドイツ人の先生による授業。詳しくは下を読んでください）。

はっきり言って、どれもそれなりに大変です。が、こうやって時間をかけてじっくりとテキストに取り組み、先生の指導や仲間の指摘を受けることによって、ドイツ語で書かれたものをドイツ語で読み、その本当の面白さやすばらしさを味わう力を身につけることができるのです。

ここでは、2018 年度の学部の授業を学生の感想を挟みながら概説します。

大宮勘一郎先生

担当分野：近現代ドイツ文学・ドイツ思想

担当授業

文学から文化研究へ

1980 年代以降のドイツ文学研究において顕著である文化研究への拡張的転換を概観した上で、文化研究的文学研究を実践する際の基礎概念やテーマについて考察する。

近代のドイツ文学史

近代文学としてのドイツ文学の揺籃期である 18-20 世紀の流れを先生が抗議してくださいます。文学研究において、文学史を学習しておくことは必須です。大宮先生の文学史の授業は歴史の流れを整理してくださるだけではなく、なぜその流れが生まれたのかも丁寧に解説してくださるため、文学史の書籍を読むだけでは決して得ることのできない知識を身に付けることができます。

宮田眞治先生

担当分野：ドイツ近現代文学

担当授業

Georg Büchner を読む

19 世紀の劇作家、小説家で、現代文学にも大きな影響を与え続けているゲオルク・ビュヒナーの作品『レンツ』を読む授業です。独文では毎年文学演習として作品を精読する授業が行われており、学部生のほとんどがこの授業に参加することになります。演習ですから作品を読みながら文法的な事柄を確認していくのが主な授業の流れとなっていますが、一人で読むのではなく学友や先生

がたと共に読むことで作品の解釈や解釈の方法についても大きな知見を得ることが出来ます。

ドイツ文学への誘い

ドイツ語圏の近現代文学から様々なジャンル（メルヒェン、抒情詩、短編・長編小説、戯曲、寓話、断章、批評的エッセイ）の作品を読んでいく。背景知識や受容史についても解説する。

ドイツ文学研究法入門

いわゆる「持ち出し専門科目」の一つです。進学予定の学生はまず駒場でこの授業を受けることで、独文科の世界を初めて体験することになります。文学部に進学は決めたけれど、そもそも文学部では何をどうやって研究したらいいのか？という疑問はどの学生も抱くことでしょう。この授業では文学研究一般の方法について本当に1から手取り足取り解説していただきます。また宮田先生の授業では先生の研究や教育に対する強い熱意に触れることができます。生徒のどんな些細な質問にも本気で考えて本気で対応してくださるので（もちろん独文の先生がた全員に当てはまることですが）、研究意欲の高い学生、なんとなく進学を決めた学生、どんな人でも絶対にドイツ文学の面白さ、奥深さを体感することでしょう。

Stefan Keppler-Tasaki 先生

担当分野：ドイツ近現代文学

担当授業

„Goethe: Dichtung und Wahrheit“

„Die Ermordung einer Butterblume“

ケプラー先生の今年度の授業は、1つめはゲーテの自伝的作品「詩と真実」、2つめはデーブリーンの「たんぽぽ殺し」について扱っています。講義の中ではドイツ語の原文はもちろん、さまざまなテキストを丁寧に読みながら、それでいて作品の内在的な解釈に留まるのではなく、文化史的、社会史的背景や文学理論など毎回様々なテーマを取り上げ議論しています。一人で読んでいては発見できない文学作品の読み方、新しい視点を授業のたびに教わり、また学生からの質問に対しても非常に親切に対応してくれます（ケプラー先生はとっても優しいです）。授業はもちろん全てドイツ語で行なわれており、慣れるまで最初はとまどうかもしれませんが、一年間続ければ、それに見合うドイツ語能力の向上を実感すること間違いありません。全体がドイツ語で行なわれ、聴き取れなかったり理解が不十分な部分も出てきたりしますが、それを補うために博士課程の院生による補講が行なわれています。この補講では、授業自体の補完のみならずそれに関する本や論文を取り上げて、読んでいくこともあります。また、映画にも造詣が深く、定期的にドイツ映画の

鑑賞会を授業外に開催しています。興味のある方は是非。

山本潤先生

担当分野：ドイツ中世文学

担当授業

ドイツ文学史解説

中世初期から後期に至るまでのドイツ語による文芸を通時的に概観し、主要な作品および作品間の関係に関する知見を深める。それを通し、中世という時代に文芸が有していた社会的役割や作品創作の背景、独自の文芸上の主題や技法を学ぶ。また、近現代文学との比較から、文芸に関する新たな視座の獲得を目指す。

『ニーベルンゲンの歌』を読む

中高ドイツ語および中世ドイツ文学の入門のための授業です。前半の期間は中高ドイツ語の文法を学習し、後半では実際に作品を読むという形になっています。中世ドイツ文学作品研究に欠かせない中高ドイツ語の語学能力、中世の文化的背景を山本先生が解説していただきます。独文に進学して初めて中高ドイツ語を学ぶという人がほとんどだと思いますが、駒場での第二外国語の授業のように中高ドイツ語文法を学習してから作品の読解に入るため、初めての言語だからと言って授業についていけないということはありません！また、作品の読解で中世の世界観についても学ぶことができるため、中世の文学作品に興味がある人にはうってつけの授業です。

ドイツ語学概論

ドイツ語の発達史を通時的に概観することにより、現代に至るまでのドイツ語の変遷に関しての理解を深める。様々な時代のドイツ語テキストを扱い、それらを実際に読解することを通し、時代による音韻・語形・統語上の変化を具体的に把握することを目指す。また、そうした変化をもたらした言語外の諸要因（文化・政治・メディア・宗教など）についての解説も行う。

時間割

文学部における卒業するため取るべき単位数は 76 単位となり、尚且つ毎学期（二年時を覗く）演習を取る必要がある。卒論は 12 単位となり、残る 64 単位は授業による。さらに、四年次になると卒業論文、就職活動ないし院試等で忙しくなるので早めに単位は揃えておくと思う。まあ一般論でしかないのだけれども。下記に学生の一例とその解説を挙げる。

二年冬学期

	月	火	水	木	金
1			方法基礎		
2				倫理学演習 (3) (関根 清三)	
3					
4	宗教学概論 (2) (鶴岡 賀雄)		宗教学概論 (2) (島藺 進)		ドイツ語学ドイツ文学演習 (3) (大宮 勘一郎)
5			美術史学特殊講義 (2) (佐藤 康宏)		

1 年のとき方法基礎を落としたのでとっていました。(笑)

月 5 ドイツ文学への誘い 駒場において開講される、独文に所属する教員による講義。後期の単位にはならない。 木 3 共通ドイツ語 教養学部の授業。トーマス・マンの「魔の山」を精読した。 金 5 ドイツ語学ドイツ文学演習 唯一の必修科目。ヘルマン・ヘッセの「クヌルプ」を精読した。
--

2年の冬学期は3つしか授業を取らなかった。

これには理由があって、第二外国語が中国語であったために遅れていたドイツ語の勉強に力をいれたかったからである。

しかし、振り返ってみればもっと授業を取るべきであったと思う。5～10は授業を取っておいた方が後々のことを考えても望ましいだろう。

三年次

	月	火	水	木	金
2	美学概論(小田部胤久先生(美学))	ドイツ語学ドイツ文学演習(2)(重藤先生)			
3	ドイツ語学ドイツ文学演習(1)(宮田先生)	ドイツ文学史概説(宮田先生)	ドイツ語学ドイツ文学演習(大宮先生)		ドイツ語圏言語文化(大宮先生)
4	ドイツ語学概論(重藤先生)		ドイツ語学ドイツ文学演習(1)(重藤先生)		倫理学特殊講義(藤村安芸子先生(倫理))
5			西洋倫理思想史概説(1)(熊野純彦先生(倫理))		

哲学に興味があるので、独文以外の授業も3コマあります。

四年次

	月	火	水	木	金
				比較言語学	
2	音声学	日本語を見 つめる			
3		日本語研究 の諸問題	ドイツ語学ド イツ文学演習 (大宮先生)		
4	ドイツ語学概 論(重藤先生)	ドイツ文学特 殊講義 (Keppler 先 生)	ドイツ語学ド イツ文学演習 (1)(重藤先 生)	ドイツ文学特 殊講義(尾方 先生)	
5	日本手話研 究				火4のトゥー トリウム(補 習授業)

私は卒業論文でドイツ語学を予定しているので、この研究室の授業に限らず言語に関する授業を多く取るようにしました。10コマ+トゥートリウムは若干多めですが、これは3年次の私の不徳の致すところにもよります。3年次に授業をしっかりと乗り切れたなら、4年次で授業自体で苦心することはさほどないと思います。

ドイツ短期留学体験記

(独文科 2008 年度学部卒)

長期は決断にも勇気がいるが、1 ヶ月程度の短期であれば旅行気分だ。夏はさておき春であれば航空券も安い。奨学金などの利用もできる。とりわけ春や夏など長期休みは大学の語学プログラムがおすすめ。日程が合わないという人やみっちりやりたいという場合は、現地の語学学校という手がある。以下は 2007 年夏に大学の語学コースに参加した体験談だ。これから短期留学をしたいと思っている人の参考になれば、と思う。

2007 年 7 月末日、私はルフトハンザの成田発フランクフルト行きの飛行機のなかにいた。どうやら里帰り風のドイツ人の隣で、ドイツ映画を見たり、飽きたらドイツ歌手の歌を聞いたり、食事とワインを楽しみながら旅へのテンションを上げようとしていた。何よりも気持ちの切り替え。夏学期を終えてすぐ、旅の準備もままならないうちの出発だったのだ。

5 月、圧倒的な語学力不足に危機感を覚え、夏の大学の Sommerkurs 参加を決めた。行き先に選んだのはフライブルク。ドイツ南部、フランスとスイスの国境に近い黒い森に面した小さな都市だ。フライブルク大学はハイデガーが学長を勤めたことも有名で、思想や文学に強い大学である。寮の代金も含め 4 週間のコースは 700 ユーロ（今年はどうも少し値上げしているようだが）。ドイツの大学の語学プログラムでは安い方で、またゲーテなどの語学学校などのプログラムと較べると格安の域だ（それくらいドイツのゲーテは高い）。価格の安さや、環境もさることながら、ヤパノロジー研究室があるフライブルク大学では H P も日本語表記があるなど（さらには現地には日本語を話せる教授や学生がごろごろいて、私営の日本語の図書館なんていうのもあった）、安心感もあり、最終的にフライブルクに決めた。



フライブルクはミュンスター(教会)を中心に放射状に広がる石畳の街で、自然豊かなドイツでも有数の環境都市だ。フランクフルトからは I C E で 3 時間ほど。スイスのバーゼルやフランスのストラスブールも目と鼻の先である。観光地でもあり土日ともなると街は人であふれかえっている。アイス屋があちこちあり、価格も日本円にして 100 円程度から。

このアイスはドイツ滞在激太りの要因のひとつともなった。



□ 1日のスケジュール□

平日は午前がドイツ語のゼミナール、午後が自由参加のフォアレズング&ゼミナールというカリキュラム。午前の語学クラスは、到着後うけたクラス分けテストの結果をもとに習熟度別にS 1～13 F 1～5があり、私はS 13のクラスにはいった。アメリカ人2人（一人は哲学専攻の大学生、もうひとりドイツ語べらべらのおじいちゃん）、エジプト人3人（2人はGermanistik専攻、一人は旅行業界志望）、ヨルダン人1人、スペイン人1、ポルトガル1（教育学専攻）、台湾1、香港1（教員志望）、チェコ、ハンガリー、イタリア（哲学専攻）、そして私という国際色豊かなクラスで、授業はもちろん雑談もすべてドイツ語。ほとんどが大学生で、専攻は哲学やら教育、そしてもちろんゲルマニスティックなど。授業は文法もおさえつつ、後半は議論。新聞の風刺画や政治、社会、文学など、テーマはさまざま。はじめはちんぷんかんぷんなことを言ったりしてたものの、帰る頃にはなんとか自分の意志を伝えようとする努力ができるところまでたどり着けた（議論の内容把握はできるようになった）。

お昼ごはんはたいていお弁当。Mensa（食堂）も利用できたのだが、値段が安いかわりに味がひどい、それなのに混んでいる、ということで実は滞在中一度も行かなかった（一度は行っておけばよかったと思う）。大学の周囲はカフェやインビス、ファーストフード店（マック、バーガーキング、スタバなど）も多くて、食べる場所に困るということはずない。アジアンフードの店も多くあるし（中華やタイ料理が一番多いかな。）、Nordsee（ドイツのファーストフードチェーン）では手巻き寿司を買うこともできる（ただし割と高い）。そういえばドイツではお米に牛乳（と砂糖）を入れて炊くMilchreisという料理があるのだが、このMilchreis用の米を普通に水で炊くと日本のお米にそっくりでおいしい。価格も安いので、ドイツでの夜ご飯はもっぱら米を食べていた。

話はそれだが、大学の話に戻ろう。午後の講義は一週完結型で、文学（詩やMaerchenなど）や思想（もちろんハイデガー）に関する講義が多かった（演習にはほとんど参加せず）。フライブルクにある文人の縁の地をめぐるSpaziergangなどもありかなり楽しめた。基本的には階段教室で50名程度が授業を受けていた感じだ。

放課後も野外映画鑑賞や、スポーツアクティビティなどさまざまな企画が催されていた。私が参加したのは、フライブルク周辺の郷土料理「Spetzelを作る」というもの。ドイツでも南のほうに位置するためか、一種のパスタ料理。あとでスーパーをのぞいてみたら乾燥したSpetzelも売っていた。

放課後特に用事がないときは、そのまま寮に戻ってご飯をつくって寮の住人たちと話したりすることが多かった。どこの国に行ってもやはり学生は将来のことには悩んでいるも

ので（寮が同じだったドイツ人がたまたまドイツ文学の研究をしていたのだが）、しどろもどろなりにも「どんなことを研究しているの」とか「将来どうするの」とかいろいろと話した。

□寮のこと□

割り当てられる寮は留学生寮ではなく、大学学生組織の寮。地方出身のドイツ人やインターン中のフランス人や、はたまたエラスムスプログラムの学生など、夏の語学プログラムの学生だけではない。8人で1つのキッチンと2つのバスルームを共有するが、男女別というわけではない。ただし防犯は割と厳しく、オートロックが2重になっており、鍵を忘れると悲惨である。私の寮は語学コース生が二人、エラスムスのスペイン人と、あとは全員がドイツ人であった。ここでも日本人は私一人。実はこの夏の語学プログラム、信じられないくらい日本人が多い（大学単位で来ているところもある）ので、こんなに日本人と接触がない環境にいたのはラッキーだったのかもしれない。朝は寮の友人と一緒に、テラスで鳥の声を聞きながら朝食を食べたり、となかなか優雅な生活だった。それから、ドイツの夏は日本と違ってからっとしている。洗濯物の乾きもよく、しかも洗濯機がいいのか（やたらハイテクだったのだ。数十種類の洗濯メニューがあった）水がいいのか、空気がいいのか、ワンピースなど洗って干しておけばアイロンかけ不要！なんてことも。寮生活で一番不愉快だったことは、ごみ当番（ごみと風呂掃除は当番制）がさぼったせいでキッチンにコバエが発生したことくらいなもんだ。



□週末のこと□

アクティビティは毎週開催されていたが、黒い森散策にのみ参加。あとはジャーマンレイルパスを使ったりしながら個人でドイツをまわった。北はコブレンツまでライン下りをしたり、チュービンゲンやウルムは日帰り。また近くの湖では、湖水浴と日光浴という、ちょっとしたバカンス気分も堪能。



短期留学の目的は、もちろん語学上達のためかもしれない。だけど、実際にドイツ文学の作家をはぐくみ、その作品に描かれているドイツの風土を肌で感じることができるというのは、現地に行かないとできない貴重な体験である。たとえば、ミュンスターの中に足を踏み入れると感じるひんやりとした空気、そうして中で響き渡るのを聴くパイプオルガンの音だとか、決まった時間になると四方から聞こえてくる鐘の音だとか、町を歩いていると出くわすたくさんの鳥とその鳴き声とか、並木道からはらはらと降ってくる白い細かい花と夏でありながら照りつけるわけではない太陽の光の木漏れ日だとか、ドイツの夏の終わりの雨が、寒さを運んでくる知らせになっていることとか、町を歩けばすぐ見つかる菩提樹や、雨上がりに湿った石畳を歩く気持ちよさ、夏の終わりの夜の冬のような寒さ、ぼんやりとした夜の街の灯り、などなどなど。もちろんひとつきは短いけど、感じ取ろうと思えばいろんなものを感じ取って学び取れる期間だとも思う。一ヶ月。あくまでも外部からのものとして、だけど終わりごろにはちょっとだけ内側から街のことを見られるようになっていくかもしれない。そうして読む作品は、そうした体験をする前とは、ちょっと違ったものになっているのではないかなあ、と私は思う。

独文科による作品&勉強メモ

独文科に所属する学生、院生が読んだ本、勉強したことを媒体と絡めてのべつ幕無しに紹介していきます。雪だるま式に積み重なった文章群をとくにご覧あれ。え、無秩序極まりないって？ まあまあ、モノとの出会いなんてそんなものです。

COSMAS II

<https://cosmas2.ids-mannheim.de/cosmas2-web/>

言語現象を観察し、解釈するような研究をしたいと考える方に。コーパス（言語研究のための検索型データベース）のシステムを一つ挙げます。マンハイムにあるドイツ語研究所

IDS (Institut für Deutsche Sprache) が公開している COSMAS II

は、新聞記事の他、比較的限定的ではありますが文学作品や話し言葉のデータも収録する、大規模なコーパス集です。利用登録をすると、学術的な目的のために使用することができます。

この「IDS コーパス」では、それぞれ関心に合わせて検索するコーパスを選び、ドイツ語の実際の用例を調べます。ドイツ語学習の際に誤用と習った用法が数多く使われているなど、意外なことが分かる場合もあります。

Metzler Lexikon Sprache. (Hrsg. von) Helmut Gluck (c2000)

Stuttgart: J. B. Metzler.

ドイツ語で書かれた言語学事典です。

『ドイツ言語学辞典』川島淳夫他編 紀伊國屋書店、1994 年

ドイツ語で見られる言語学的な現象、言語学上の気になる用語や概念があったら、本書を引いてみてください。独文研究室の辞書室にもあります。

『変身』／フランツ・カフカ

『ある朝、グレーゴル・ザムザがなにか気がかりな夢から目をさますと、自分が寝床の中で一匹の巨大な虫に変っているのを発見した』

言わずと知れたカフカの作品。映画化もされている。どんな虫に変身したのか、ゴキブリだとかムカデだとか言われているが、個人的にはカフカの変身を読むと決まってエッセーの虫を思い出す。

『城』／フランツ・カフカ

「外部からやってきた男がとある共同体に紛れ込む」という構図は、なるほど確かにしばしばカフカと並んで語られる、安部公房の『砂の女』に共通する。ただし『城』の主人公 K はフルネームや迷い込む前のエピソードも持たないし、村にやってきた（あるいは

とどまる) 目的だってほんとうのところ分からない。だいたい“測量士”という肩書きだって既存の前提というよりは、村人に聞かれたことで生じてきたものという感じである。その村人達だってKを追いつきたいのかとどめたいのかどうしたいのか分からない。さらに未完ときたら、頭の中はクエスチョンマークだらけだ。分からないだらけなのに、未完と分かっているながらも、凍える吹雪を想像しながらただただもくもくと読み続けてしまう。

『カフカ短編集』／池内 紀訳／岩波文庫

どれも短いものばかりで読みやすい。昨年作家金原ひとみが声優を演じ、映画化された『田舎医者』などが収められている。

『ピアニスト』／エルフリーデ・イエリネク

作者は2004年ノーベル文学賞を受賞。音楽学校でピアノ教師として教鞭をとる主人公エリカ。母親との二人暮らしで長く抑圧された生活を過ごしてきた彼女であったが…映画化されカンヌ国際映画祭グランプリ受賞。

『飛ぶ教室』／エーリヒ・ケストナー

児童小説といえばエンデ、そしてケストナー。クリスマスという思い出されるのがこのケストナーの作品。舞台はとあるギムナジウムの寄宿舎。貧しい家に生まれながら両親を大事にする心優しい少年マルチン、劇中劇「飛ぶ教室」の台本を書いた文才あるヨナタン、正義先生や禁煙先生など魅力的な登場人物がたくさんでてくる。

『ブリキの太鼓』／ギュンター・グラス

近年ナチス関与が問題になり話題になったノーベル賞作家ギュンター・グラス。映画化もされた『ブリキの太鼓』は彼の幼少期の体験も反映されているらしい。大人になることを否定し、3歳児の姿のままにその後の人生を生きていくオスカル少年。第一次世界大戦、ユダヤ迫害、ナチスなど当時の社会状況がめまぐるしく描かれる中で、卑猥でグロテスクな世界が狂気の香りをまとい描かれていく。

『色彩論』／J.W.ゲーテ

ニュートンの光学に対する反論として20年の歳月をかけて完成された。文学作品というよりは、ゲーテの研究成果。教示篇、歴史篇の2つからなり、さらにゲーテ自筆の図版集もついている。ファウスト等の作品にもこの研究成果が随所に見られるといわれている。自然を機械論的に捉えようとする当時の自然科学に対するゲーテの警鐘とも言える作品。歴史篇ではギリシア時代まで遡り、時代の流れの中で、ヨーロッパで色がどのように考察されてきたのか簡潔にまとめられており、大変面白い。

『マルテの手記』／ライナー・マリア・リルケ

ドイツ人作家でパリでの生活（それも比較的長期にわたるような）を体験した作家は少なくない。ハイネ、ツェラン。そしてこのリルケもまたパリに15年ほど滞在した。その際に書かれたのがこのマルテの手記である。ちなみに、生前もバラの詩を多く遺し、バラの詩の墓標で知られるリルケ。51歳でこの世を去った彼の死因も、またそのほかならぬバラのとげによってであったことは感慨深い。

『逃げていく愛』／Bernhard Schlink ベルンハルト・シュリンク

松永美穂訳 【新潮社（2001）】

短篇集。妻の死後、見知らぬ男から届いた手紙の謎を夫が探る『もう一人の男』。遺された一枚の絵を手がかりに、息子が父親の暗い過去をたどる『少女とトカゲ』など、全7篇。

『砂男』／E.T.A.ホフマン

ロマン派を代表する作家ホフマン。幻想的で怪奇的な物語を多く遺した。この話に出てくる「砂男」はドイツに伝わる民話の妖精。砂の入った大きな袋を持つ老人で、その砂を目にかけてしまうらしい。なんだか砂かけ婆に似ている。（でもドイツでは Sandmannchen というかわいらしいアニメがある）

推理小説で有名な乱歩もまた数々の怪奇小説を残しているが、平野嘉彦氏の『ホフマンと乱歩 人形仕掛けと光学器械のエロス』ではホフマンと乱歩の作品を取り上げ、両者のモチーフなどの共通点などについてエキサイティングな議論が繰り広げられている。

『ドイツ悲劇の根源』上・下／ヴァルター・ベンヤミン

浅井健二郎編訳 【ちくま学芸文庫（1995-2007）】

ベンヤミンの主著『ドイツ悲劇の根源』の完訳。同作に関連する著作（「暴力批判論」、「運命と性格」等）やバロック悲劇の代表作の梗概が付録され、豊富な訳註とともに、『ドイツ悲劇の根源』を「読む」ための事典的機能をも提供する充実の翻訳である。

1928年1月、ベルリンの新興出版社ローヴォルトから『ドイツ悲劇の根源』（以下、『根源』）が刊行されたとき、当時のある書評は同書をこう評した―「知的アウトサイダーを好まれる向きにはぜひお薦めである」。教授資格請求論文として書かれた『根源』は、「これなら六人が教授資格をとれるだろう」（ゲルショム・ショーレム宛書簡）との観測に反して、ベンヤミンのアカデミシャンとしてのキャリアに終止符を打った作品として知られる。教授資格取得失敗の一件については、その理由をめぐってさまざまな憶測が囁かれたものだが、事実は案外単純なものだったのかもしれない。「美学の時代はあらゆる意味で過ぎ去った」と考える人間の手になる、「純粋に美学的な考察」の価値に疑念を表明する論文は、あろうことか美学科に提出された。これではなかなか論文は通らない。やはり最初からどこか歯車が狂っていたのだろう。

もっとも、ベンヤミン本人に「知的アウトサイダー」をきどるつもりはなく、むしろかれは「真のアカデミックな研究方法」を実践する一個の学術論文を書いた気でいたらしい。

バロック悲劇のアレゴリー形式という問題をめぐって、図像解釈学・体液病理学・星辰影響論・ユダヤ思想・ヘレニズム思想・政治神学等々、各専門領域で別個に蓄積されてきた知を縦横無尽に参照・引用しつつ、そのように寄せ集められた知のあいだに予想外の連絡関係を発見すること。ベンヤミンが理解する意味での真にアカデミックな研究方法は、しかし、学問の専門化と分業体制が進む時代にあって反時代的に非学術的なものとみなされた。『根源』は、文学史料から美学科へ厄介払いされた挙句（同論は当初、文学史料への提出を予定されていた）、美学科正教授ハンス・コーネリウスは、芸術哲学の範疇からの逸脱を主な理由に挙げて同論文に否定的評価を下した。大学側が求めていたのは、「純粹に美学的な考察」に従事する一人の専門家であって、「六人」分の知性を合わせもつようなラディカルな知的精神ではなかったわけだ。

20 世紀の名著のひとつに数えられ、「〔初期ロマン主義的な意味での〕批評の名に値する唯一の書物」（ジョルジョ・アガンベン）とも評される『根源』は、その思想的内容もさることながら、ベンヤミンの書籍狂としてのマニエリスムが存分に発揮された作品でもある。「バロックのとんでもない古書」からの選りすぐりのモットーの収集と、出典が明示されているものだけでも約五百の引用のモザイク的配置に、本文の記述以上に心血を注いだといっても過言でない『根源』は、さながら「アレゴリーのアレゴリー」（ベルント・ヴィッテ）の観を呈しており、こうした「まじめな遊び」（ゲーテ）の要素が、同書の思想的内容と相俟って、読み手の知性を挑発しつつけている。どうかスリリングな読みをくりかえし堪能していただきたい。

『ベンヤミン・コレクション』1-4 / ヴァルター・ベンヤミン

浅井健二郎編訳 【ちくま学芸文庫（1995-2007）】

ヴァルター・ベンヤミンの主要著作を網羅した待望のアンソロジー。

1892 年ベルリンの裕福なユダヤ人家庭に生まれたベンヤミンは、博士号取得後、教授資格取得をめざすも叶わず、文芸ジャーナリズムの世界に転身、1920 年代なかば以降、フリーの批評家として書評・エッセイ・翻訳を発表、ラジオ放送の仕事にもかかわった。1933 年ナチスの権力掌握を受けてドイツを脱出、パリを中心に亡命生活を送りながら批評活動を継続するも、1940 年逃避行の途上、スペイン国境の町ボル＝ボウで服毒自殺を遂げた。

ドイツ哲学の伝統を背景とした初期の秘教的・形而上学的エッセイからマルクス主義を経由した後期の歴史哲学へ、という一連の思想遍歴を通じて、ベンヤミンは一貫してジャンルとしての「批評」の確立とその実践を追求した。みずから「範例的批評」とみなした『ゲーテの親和力』、アレゴリー概念復権の嚆矢となった主著『ドイツ悲劇の根源』は、アドルノの思想にも深い影響を及ぼした。亡命期の論考『複製技術時代の芸術作品』は、メディア論の古典としての地位を獲得している。書籍収集家の本領を存分に発揮しつつ、テクストのモザイクから「近代の根源史」を浮かびあがらせようと試みた未完の断章・引用群『パサージュ論』（『ベンヤミン・コレクション』には未収録）は、斬新な着想の宝庫にして、19 世紀を考えるための貴重な資料集である。体系的理論書の類を残さなかったベンヤミンだが、その領域横断的な思考スタイルは、「文学闘争の戦略家」（『一方通行路』）の柔軟で機敏な知性のありかたを示したといえる。

戦後まもなく精力的な遺稿編纂作業が進められた結果、その思想は漸く広く知られると

ころとなり、60年代の学生運動を契機に受容が加速、一種のブームが湧き起こった。いつしか人文社会科学の各分野で最も頻繁に参照・引用される思想家のひとりとなったベンヤミンに、多くの人びとは今日なお再読のチャンスを求めてやまない。

『ジョゼフ・フーシェ ある政治的人間の肖像』／シュテファン・ツヴァイク
高橋禎二・秋山英夫訳 【岩波文庫】

ツヴァイク（1881-1942）はウィーン生まれのユダヤ系作家。日本では現在それほど読まれても研究されてもおらず、もっぱら「ベルばら」の元ネタと言われる評伝『マリー・アントワネット』で知られている。が、難解と言われるドイツ文学のイメージを覆すような純粋に「面白い」この作家への入り口としてまずお勧めしたいのが、やはりフランス革命期を生きた政治家フーシェの伝記だ。いわば革命～ナポレオン時代の裏面史である。扱われている時代の様々な事件そのものはよく知られているので、その裏で起こっていた奇想天外な出来事もより一層楽しめるに違いない。

僧院教師からフランス革命に身を投じ、ジャコバン派として恐怖政治に関わり、ロベスピエールとの抗争に勝って、一時は追放されながら再び地位を上げてナポレオンの下で大臣になる。王政復古時代には再び官職に就くが、最後には過去を暴かれて失脚しひっそりと人生を終える。あらゆる局面で風向きを的確に読み、裏工作に長け、常に勝者の側について生き残り続ける黒幕フーシェの姿は、世界史の表面を読んでも決して見えてこない。

忘れ難いいくつかの場面から最初のを紹介しよう。国民議会で王の処刑について多数決が行われ、一人一人壇上で死刑か助命かを表明していく。フーシェは先刻まで王の助命を決然と語っていた。しかし彼の番が来るまでに「計算のたくみなフーシェは投票を数えていたのであって、もし助命に投票すれば、間違った党に、自分の決してくみしたくないだ一つの党、少数党に属するであろうということを見てとっていたのである」。彼はためらうことなく死刑に投票する。必要とあればどんな党派にも味方するが、負ける方にだけは絶対につかない。これこそがフーシェの生き方の基準である。

それ自体劇的な時代を扱って、なおかつ普通では考えられないような、変節に次ぐ変節のむちゃくちゃな生き方をした怪人物の生涯を追っていくのだからつまらないはずもなく、しかもその筆致は機知と真剣な考察とが交錯して決して飽きることがない。ツヴァイクの評伝というのはいわゆる伝記小説ではなく、基本的なスタンスとして、丁寧に史料を調べてあくまで事実中心に、どうしてもわからない内面的部分に関しては「心理学的」想像力をもって解明していくという形を取っている（実際この作品、初めて日本に紹介された時には「新書」として出ている）。だからぱっと見るとかぎっこ（会話）が少なくてとっつきにくく見えるかもしれない。

が、騙されたと思って文庫本1冊なのでぜひ手に取って帰りの電車の中で読んでみてほしい。きっと駅から自宅まで歩く5分か10分の道程ももどかしく、帰り着くや再びあなたは「フーシェ」と顔を合わせているだろう。「事実は小説よりも云々」という言い古された言葉が、名手の筆によって揺るぎない真実として体感されること間違いない。

なお、岩波文庫では著者名の表記がツ「ワ」イクとなっている（『マリー・アントワネッ

ト』も) のでご注意を。岩波版の訳文は日本語として若干古風だが筆者は好みである。ツヴァイク全集にも収録されており (11 巻)、同時収録の史論も興味深い。

『権力とたたかう良心 カルヴァンとたたかうカステリオン』

／シュテファン・ツヴァイク

ツヴァイク全集 17 高杉一郎訳 【みすず書房】

『ジョゼフ・フーシェ』が万人向けの魅力的な読み物だとすれば、ツヴァイクという作家の人となりに興味を持った人には、この「カステリオン」が必読の書だ。自伝とされる『昨日の世界』(ツヴァイク全集 19・20 巻) が個人的経験や感慨以上にヨーロッパの社会や文化全体の回想録となっているのに対し、この作品は評伝という形をとりながら、他のどの作品よりも作家自身の内面的情熱に満ちているからである。

ユダヤ人にして平和主義者だったツヴァイクは、ファシズムの脅威を感じて 1934 年にロンドンへ亡命し、最終的にはブラジルに至るも、悲惨をきわめる世界大戦の情勢に絶望してその地で自殺を遂げることになる。彼が生涯を通して問い続けた「精神の自由」への熱い思いが最もストレートに伝わってくるのが、亡命中に書かれたこの評伝である。

宗教改革の指導者としてジュネーヴで一種の神権政治を敷いたカルヴァンは、市民の生活を徹底的に禁欲的に抑圧し、自分に反対して三位一体説を否定するにいたったミゲル・セルヴェート(セルヴェトゥス) という人物を拷問・投獄し、生きながら火刑に処するというカトリック顔負けの残虐な所業に出た。こうしたカルヴァンの狂信、不寛容に対して、命を懸けて非難の言葉を発したのが、かつての同志でもあったセバスティアン・カステリオン(カステリヨ) であった。彼は異端とは相対的な概念にすぎず、個々人の精神的な自由は、いかなる力によっても奪われてはならないと訴えたのである。「一人の人間を殺すことは、決して教義を守ることではない。それは人殺しにすぎない」——カルヴァン派の激烈な攻撃に対して彼は孤独な闘いを続け、ついに裁判にかけられることになるが、それを待たずに病死する。

カトリックの腐敗をただし近代的宗教の基礎を築いたカルヴァン、というヒロイックな人物像の裏面(多少誇張された部分はあるが)を描き出し、無名の闘士カステリオンを現代によみがえらせたというだけでも、この作品は十分に意義深い。しかしツヴァイクがこの二人を取り上げた意図はそれだけではなかった。

カステリオンの物語を通してツヴァイクが目指したのは、あらゆる「狂信」、精神の自由にとってのあらゆる脅威に対する抵抗の意思を示すことだった。16 世紀の宗教的独裁者カルヴァンは、現にそれをはるかに上回る強大な権力でヨーロッパを席卷しようとしているアドルフ・ヒトラーに重ね合わせられている。それは「象に立ち向かう虻」——全く勝ち目のない闘いであり、独裁を倒す力は彼らのか細いペンには到底備わっていなかった。亡命作家ツヴァイクはそれをよく分かっていて、それでも「精神の自由の思想だけは不滅に永遠にくりかえされる」と確信する。迫害される自由の闘士を自らに重ね、おのれの言葉に乗せて不滅の真理を未来へと羽ばたかせようとするかのように。

自由——良心の自由、信教の自由、それはいまや我々誰もが信じて疑わない価値となっ

た。あるいはこの価値を信じて疑わない者だけが「我々」として認知される、と言うべきかもしれない。

だが、それが広義の「ヨーロッパ」——それを事実上無条件に受容した日本という文化圏も含めて——、つまりは文化的、経済的覇権を持つ陣営に固有の理念でしかなく、人類普遍の真理などではないという現実を、今日に生きる我々はいやというほど痛感させられている。異なった「真理」を持つ他者としての「文明」の存在を、我々は好悪は別にして承認せざるを得ない。自由を「押し付けよう」とする西洋と、その権力性／暴力性を敏感に感じ取って反発する非西洋という構図が至る所で繰り広げられている。その一方で、民主社会の内部においては、獲得された「自由」を当然のように振りかざして、あたかもそれ自身権力のように暴力すれすれの思想・言論もまかり通るようになっている。このような現代において、果たして上に紹介したようなツヴァイクの思想がどこまで現実的な意味を持ちうるのか、疑問に思われる方も少なくないかもしれない。

カルヴァンもまた、新生の反カトリック的宗派として迫害を受けていた時代には「信教の自由」の提唱者であった。独裁的な権力を得て自らの教義を暴力的に市民に押し付けることが可能になったとき、彼はカトリックも敢えてしなかったほどの苛烈な迫害者となったのである。自由なくして力でもって自らの信念を押し広げる権限を得たとき、人はもはや自由を語らなくなる、いや（本来の意味で）語ることができなくなる、のではないだろうか。そうだとすれば、純ヨーロッパ産の一理念にすぎない「自由」をいま語るということに、一体どのような正当性が与えられるというのか。そう問われた時、強者である我々は返す言葉を持たない。

一つ言えることは、ツヴァイクがもし「(権力者は) 精神の自由を尊重せよ」という政治的主張を繰り広げ、絶対普遍的真理としてそれに覇権を与えようとしていたのだとすれば、その基盤であったヨーロッパがいつてみればもはや自由を必要としなくなってしまった今日において、むなしく響くのもやむを得ないだろう。しかしながらもし彼の姿に、精神の自由のみを恃む弱き個人、おびやかされる者の命がけの闘いを見るのなら、ただそういう存在において初めて真実となる「自由」の叫びに、今や勝者となったヨーロッパ、覇権を持つ者である我々こそが、耳を傾けなければならないのではないだろうか。

「いつの時代になっても、あらゆるカルヴァンに抵抗してひとりのカステリオンが立ち上がり、信念の自主性に対する崇高な権利をあらゆる暴力から守るであろう」——この静かな宣言を遺し、敗れたツヴァイクは6年後に自ら生命を絶った。

『チリ地震』／ハインリヒ・フォン・クライスト

近代の到来を告げる大事件といえ、何はさておきあのフランス革命が頭に浮かぶけれど、実はこれを遡ること30年あまり、18世紀のヨーロッパはすでに、革命の衝撃に勝るとも劣らない激震に見舞われていた。1755年11月1日、ポルトガルの首都リスボンを襲った大地震がそれである。繁栄を誇ったリスボンの街は一瞬にして灰燼に帰し、6万の人々が命を落としたと言われる。

しかし、揺らぐはずのない大地が大きく揺らいだとき、音を立てて崩れ去ったのは壮麗な首都の街並みばかりではなかった。リスボンの街とともに、旧来の世界秩序もまた根底

から揺さぶられることになったのである。なるほどそれまでの暮らしのなかにも幾多の不幸は訪れたが、人はまだ神の摂理を、世界のプランナーたる神の善意を信じていることができた。ところがどうだろう。命を落とした者のなかには、熱心に祈りを捧げていて教会の下敷きになった人々が数多く含まれていたという。その一方で、朝から早々と売春宿にしけこんでいた連中や、牢獄に繋がれていた犯罪人たちがピンピンしていたりする。善人も悪人もあったものではない。この世界を律し人の生死を分かつものは、神の摂理などではなくて、どうやらまったくの偶然であるらしい。地震は、この不気味だが決して否定できない人間の条件を明るみに出してしまったのだ。

クライスト (1777-1811) の短編小説『チリの地震』(1806) は、そんな偶然の不気味さ、それがよびさます戦慄に、真正面から向き合った作品である。直接の題材は 1647 年にチリのサンチャゴで起きた地震だが、クライストの脳裏には当然リスボンの地震があった。既成の秩序がすべて崩れ落ちた世界の様相が、畳み掛けるような文体で一気呵成に描かれている。それは決して「慰め」や「救い」を与えてくれる物語ではないけれど、だからこそ誠実に、偶然に翻弄されつつも懸命に生き、死んでゆく人間の姿をわたしたちに伝えてくれるはずだ。ちなみに、1890 年 (明治 23 年) には森鷗外が『地震』の題でこの作品の邦訳を発表している。日本に最初に紹介されたドイツ文学作品のひとつである。以下、ストーリーをかいつまんで紹介しよう。

物語はある若い男が牢獄で首を吊ろうとしているところから始まる。ジェロニモという名のこの男、かつて家庭教師をしていた家の一人娘ジョゼフェと「わりない仲」となり、拳闘、尼僧となった彼女のもとに忍んで行って妊娠させてしまった。ジョゼフェはあろうことか聖体奉祝の行進の最中に産気づき、子供を出産。「途方もないセンセーション」を巻き起こした恋人たちは捕らえられ、ジョゼフェには死刑の判決が下る。そして処刑の当日、サンチャゴの街にはジョゼフェを刑場にともなう鐘の音が鳴り響き、その鐘の音を聞きながら、獄中のジェロニモは失意のうちに自殺を図る。だが、二人の命が消え入ろうとするまさにそのとき、地震の一撃が街を襲う。

揺れる大地、沸き立つ川、次々に倒壊する建物、人々の阿鼻叫喚。この全面的なカストロフのなか、ジェロニモとジョゼフェ、そして彼らの子供は辛うじて命を取り留める。つまり地震は、恋人たちを死の淵から救い、逆に彼らを死の淵に追いやった街の権力機構を完全に破壊したわけだ。

街の郊外に逃げ延びて再会を果たしたジェロニモとジョゼフェは、安堵と喜びをかみしめつつ一夜を明かす。そして翌朝。二人が目にするのは、昨日までとは打って変わった思いがけず美しい世界である。地震の惨禍を逃れた人々は、あたかも地震という「共通の不幸」によって「一つの家族」になったかのように、身分の違いを超えて互いを気遣い、助け合っている。二人にたいしても同様に、罪人の二人を見ても誰ひとり咎め立てる者はおらず、それどころか皆好意をもって暖かく接してくれる。「人びとの地上の財がことごとく潰滅し自然がまるごと滅亡してしまいかねなかったあのおそろしい瞬間の只中にこそ、人間の精神そのものがあたかも美しい花のように花開いたかのようなだった」。不意に出現した宥和と寛容の世界。その様はさながら地上の楽園のようであり、ジェゼフェの胸には〈あの地震は神の恩寵だったのではあるまいか〉という思いが抑えがたくこみ上げてくる。

そうこうするうちに、彼らのもとにひとつの消息が伝わってくる。倒壊を免れたただひ

とつの教会で、「これ以上の禍から護りたまわんことを天に請うべく」ミサが執り行われるというのである。ほかならぬ今こそ神の前にひれ伏したいと切望するジェロニモとジェゼフェも、ドン・フェルナンドなる貴族の家族とともに教会へ向かう。オルガンの音がとどろき、荘厳な空気に包まれた教会。集った群衆は物音一つたてずに説教の言葉に耳を傾けている。ところが、説教を始めた長老の神父が、地震を街の道徳的頹廢に下された天罰であると述べ、さらにジェロニモとジョゼフェの行いを神への冒瀆であると断罪して、二人の罪人を「地獄の頭目ども」の手に引き渡せと言い放つと、場内の空気は一変、教会は恐るべき修羅場の様相を呈する。ジェロニモとジョゼフェがその場にいるという声が響き渡るや群衆は暴徒と化し、まずはジェロニモと彼の傍らにいた婦人が（ジョゼフェと間違われて）棍棒で殴り殺され、ついでジョゼフェ本人、ついにはジョゼフェが母親代わりになって抱いていたドン・フェルナンドの子供までが（ジョゼフェの子供と間違われて）血祭りにあげられてしまう。こうして、ジェロニモとジョゼフェは地震によって命を救われてからわずか一日で死に、彼らが東の間体験した地上の楽園は跡形もなく消え去る。後に残されたドン・フェルナンドが、リンチ殺人を免れたジェロニモとジョゼフェの子供を養子として引き取るところで、小説は閉じられている。

『小説の理論』(Die Theorie des Romans) / ルカーチ ()

原田義人・佐々木基一訳 【ちくま学芸文庫 (1994)】

駒場でまだ1年生だった頃、英Ⅱの授業で「Georg Lukacs」を「ジョージ・ルーカス」と発音して、自分がかった失笑の意味もよくわからなかった僕が、ここで「ルカーチ」の『小説の理論』をお薦めするのは滑稽な話ですが、本当は、僕にとっての『小説の理論』のような本を皆さんが一冊持っていれば、きっと楽しいことになると思っただけで、そういう前提で読んでください。——生協書籍部に置いてある本はきっと必読書なんだと思って買い漁ったものの、いざ家でひもといってみると全く歯が立たず、「翻訳がひどい」だとかなんとかブツブツ言いながら、「**入門」をうたった新書や、「**分でわかる**」式のものへと妥協していった、なんとも後ろめたい日々。もちろん、そんな時間が無駄だったとはいまでも思っていない。でも、その中で唯一、定期的に読み返しては、歯が立たないなりに少しずつ傍線箇所を増やしていったのが、『小説の理論』でした。初めてこの本を手にとったのが2年生の頃だったので、もうこの本と付き合っただけ長いですが、いまだに意味不明な箇所が9割で、しかも残りの1割だって誤読の可能性大。でも、「生産的な誤読」というものがある、とどこかで聞いて、それを真に受けた僕は、いまだに『小説の理論』をネタに妄想を膨らませ続けています。『小説の理論』という、一生かかって解くべき謎を心に抱えていて、その謎を解くヒントを求め他の本を漁読していくという、RPGのイメージ。人生の困難にぶち当たると、頭の中に親父がムクムクと出てきて、「親父ならこうするだろうなあ」なんて考えるように、「ルカーチならこう読むだろうなあ」と妄想せずにはいられないのです。浮気したり、反抗したりもしました。それでもこの本のもとに帰ってきってしまう。何度読んでも理解不能だった箇所が、あるB級映画のワンシーンや、あるいは友達の何気ない一言がきっかけで、「解けた」と思えたときの快感は、やみつきになります。この「瞬間」に遭遇すると、なんだか自分がとんでもない発見をしたような気分になって、

妙にソワソワ、部屋中をうろつく始末。ルカーチがいつも正しいわけではないけれど、自分が何かを考えていく起点にはなってくれています。——もし気が向けば、みなさんも、そんな相方を探してみてもはどうでしょうか。ドイツ語圏に「も」、一生をともにするに値するテキストが、きっといくつだってあります。

（その他のお薦め：『関口存男著作集』—まずは自分の不勉強を悟る；
『独和大辞典』（小学館）—ウィスキーを舐めながら誤字を探す趣味の高尚さ；
『ドイツロマン派全集 17—呪縛の宴』（国書刊行会）—一人が読まないものをこそ読む；
Schnizler の短編を独語で—平易な語彙で楽しめる；
『西洋哲学史』岩崎武雄；
『芸術の哲学』渡邊二郎（ちくま学芸文庫）・『歴史の哲学』（講談社学術文庫）；
『ガダマーとの対話』・『真理と方法』ガダマー；
『批評の精神』・『偉大なる暗闇』高橋英夫（ともに講談社文芸文庫）

『鏡のなかの鏡』（„Der Spiegel im Spiegel “）／ミヒャエル・エンデ

【岩波現代文庫】

日本における「ファンタジーブーム」は、この人の作品からと言っても過言ではないのではないのでしょうか。もはや説明不要かもしれませんが、『はてしない物語』（『ネバーエンディングストーリー』の原作）や『モモ』の作者ミヒャエル・エンデによる大人向け短編集です。長短 30 の不思議な話、よくわからない話（がほとんどですが）、気持ち悪い話、何だかぐっとくる話。やみつきになる人も多く、「裏代表作」と言ってよいでしょう（代表作の座には、やっぱり『はてしない物語』に座ってもらいたいです）。

でも、短編としてはカフカのような牽引力には欠けるのかもしれません。切れ味の点で。というのは、ひとつひとつはもちろん独立した短編なのですが、「連作短編」というコンセプトゆえか、場面の次々と変わる長編を読んでいるような気もしてくるからです。黒澤明の『夢』のような感じといえばわかりやすいでしょうか。

原書は八重洲ブックセンター洋書コーナーにもあり、入手しやすいです。この本を捧げられた父エトガー・エンデの挿絵も、小説以上に不可思議な雰囲気のもので、くせになるかもしれません。ちなみに、挿絵の画質は邦訳の方がずっと良いです。”

『モモ („Momo “)』／ミヒャエル・エンデ

【岩波書店】

エンデの作品は、作品の性格上、ドイツ語も易しいものがほとんどです。でも、その易しい言葉がいったい何を語っているのかを聞き取るのは、実はそれほど単純なことではないような気がします。

たとえば、そうですね……『モモ』の翻訳で意見が分かれている箇所があります。「Denn Zeit ist Leben.」というところです。あなたならどう訳すでしょうか。

ベストセラーとなった大島かおりさんの訳では、「なぜなら、時間とはすなわち生活だからです」となっています。議論（というほど発展してはいませんが）になったのは「Leben」の訳で、これは「命」のほうが適切なのではないかという意見が出ました。著者自身、あそこは「命」のほうがよかった、と述懐しているのをどこかで読んだ覚えがあります。

しかし、私は敢えて「生活」のほうに軍配を上げたい。ほかのところでも、「生活」という意味で使われているし、何より時間泥棒に時間を盗まれて（彼らの詭弁に引っかかり、時間を「時間貯蓄銀行」に預けて）、やせ細っていくのは「生活」とか「人生」といったもののなんですよ。命が削られていくわけではありません……というより、そう読んでもいいのか、やっぱり「命」がいいかな、いやいやここは「生活」でしょ——

こんなふうに、独文での生活は続きます。

『言葉 („Die Sprache“)』／カール・クラウス

【法政大学出版会】

次に該当する人は、カール・クラウス——19世紀末ウィーンの諷刺家——の言葉に共振するところがあるか、あるいは全く意味がわからず、そのため逆に彼の言葉に惹かれてしまうかもしれません。

- ・ 広い意味での芝居が好きである
- ・ それゆえお笑いも結構好きである
- ・ 笑いの仕組みが気になる
- ・ 人を食ったような物言いも好きである
- ・ でも自分はあまり上手くできない
- ・ 冗談が通じないと言われたことさえある
- ・ こちらの冗談も通じない
- ・ 要するに、痛烈なコミュニケーションギャップ体験がある
- ・ そのためか天然と呼ばれがちである
- ・ でも空気は読めているつもりである
- ・ 天然から一歩踏み出したキャラ作りをしたい

ただし、クラウスのドイツ語はかなり難しいです。その上、話がローカルすぎてわからないところもたくさん。そんな中で、„Die Sprache（邦訳：言葉）“は言語に関するエッセイをまとめたもので、テーマとしてはとっつきやすいかと思います。ドイツ語法の授業もしてくれます（nur noch と nur mehr の違いとか）ので、一度受けてみてはいかがでしょうか。”

『群衆と権力』／エリアス・カネッティ

岩田行一訳 【法政大学出版局（上下巻）】

カネッティ（1905-1994）はブルガリア生まれのスペイン系ユダヤ人作家です。ドイツ語を学んだのは10歳近くになってからでしたが、生涯一貫してドイツ語で執筆し、1981年にはノーベル文学賞を受賞しています。戦前は書物狂の中国文学者を主人公にした小説『眩暈』（1935）や不条理劇の先駆となるような数篇のドラマをヴィーンで発表し、オーストリアがナチスによって併合される直前にイギリスに亡命、戦後はロンドンとチューリヒに居を構え、「ファシズムの根源」を明らかにするためにライフワーク『群衆と権力』（1960）に取り組みました。この他にも膨大な量のアフォリズム集や3巻からなる自伝を発表して

います。『群衆と権力』はその後カナダのメディア理論家マクルーハンやフランスの哲学者ドゥルーズ＝ガタリ、さらには日本の小説家安部公房などによって取り上げられ、いわゆる現代思想において重要な位置を占める作品となります。原タイトルは Masse und Macht という韻を踏んだ美しい響きですが、カネッティは「群衆」と「権力」という二つの観点から西洋のみならず人類の血腥い歴史を古今東西の文献を通じて究明しました。カネッティの分析の特徴は「諸国民の群衆シンボル」を論じた次の一節によく現れています。「ドイツ人たちの群衆シンボルは軍隊であった。だが、その軍隊は単なる軍隊以上のものであった。それは行進する森なのであった。(・・・) それぞれの木はいつも人間よりも高く、生長しつづけ、ついには巨木となる。その不動の姿は戦士の毅然たる態度と多分に共通している。一本の木においては、樹皮は甲冑に似ている。同じ種類の多くの木が一緒に生えている森においては、樹皮はむしろ軍隊の軍服を連想させる。ドイツ人にとっては、無意識のうちに軍隊と森とがあらゆる点で互いに融合していた」。「森」はグリム童話やその他の多くのドイツ文学の作品に登場する重要なモチーフであり、また現代ドイツにおける環境保護運動の象徴とも見なされますが、カネッティは森の木々の整然とした「秩序」が同時に軍隊の「秩序」に繋がりを有するものであることを洞察しています。通常社会学や政治学からは締め出されるような、連想や飛躍に満ちた想像力による分析こそ『群衆と権力』の尽きせぬ魅力の一つであり、カネッティのこうした思考のスタイルは同時に「文学研究」の対象ともなるのです。

『レンツ』 / ゲオルク・ビュヒナー

ゲオルク・ビュヒナー (1813-1837) の『レンツ』は、実在したシュトゥルム・ウント・ドランク期の詩人ヤーコプ・ミヒャエル・ラインホルト・レンツ (1751-1792) の悲劇的な生涯を題材にしている。従来、レンツ及び彼の作品への評価はゲーテの酷評によって大きく規定され、「ゲーテの猿」という渾名に象徴的なように、笑うべき逸話として語られるに留まっていた。

社会主義思想に共鳴し、革命運動へも関わっていたビュヒナーは、亡命中に医学を学びつつ創作をしていたが、1848 年の三月革命へと社会の緊張が高まり、既存の価値体系が揺らぐ中で、彼が着目したのは、ゲーテではなく、ゲーテという絶対価値の影に埋もれていた無名の作家レンツであり、レンツの作品ではなく、その生涯であった。ビュヒナーは、レンツに関する情報を集め、それを分析、解釈し、非常に即物的な筆致で、短い作品を書いた。それが、分量にして 30 ページほどのフラグメント、つまり未完の作品として、今日に伝わっている。

一般にレンツは精神分裂病であったとされる。彼にまつわる奇行についての証言も多く、生涯続いた錯乱と沈鬱、高揚と絶望のサイクルは、病として語るほかなかった。ところがビュヒナーは、そのようにレンツを説明することをよしとせず、彼を作中にその狂気ともども蘇生させようとした。こうして蘇った「レンツ」は、作者ビュヒナーや、彼の生きた時代の病をも収斂し、いわゆる勝者の歴史とは真逆の視点から人間存在について語り続けるアウトサイダーへと変貌した。

あまりにも鋭敏で理想に憧れるレンツは、世界の些末な事象に次々と、救済と破滅の予

兆を読み取っていく。長い孤独な放浪と、スイスの山奥に見いだした人類の理想郷のような友愛と謙譲の共同体への感激、散策の途上に一瞬見た少女等への崇拜、しかし一方で、現実的な恋愛を自ら壊し、父親との葛藤は収まることもなく、いつも不安にかられ、夜中に大声を挙げて、町の噴水へと身投げし、死ぬに死にきれず、一日中部屋の床に転がり、ふと神を再発見したとして教会で激烈な説教をしたかと思うと、それに傷ついて泣き続け隣の村で見知らぬ少女が死ぬと、全身に灰をかぶり弔いに行き、葬儀の際に暴れて、村人に捕縛される、一日中、山を歩き回り、世界との合一という多幸福感に浸りつつも、日が暮れると襲う憂鬱の発作に苦しみ、自ら身体を傷つけ、叫び、再び噴水に身投げする。

彼にとって、世界と人間の間には、回復不能な断絶がある。人々はそれに気づいていない、人々はその危険と不幸に気づいていない、自分が証言するしかない、こうしてレンツは「論理的一貫性を、論理的一貫性を」と絶叫するが、人々にとって彼の姿は決して異様なのではなく、むしろあまりにも人間存在の秘密、絶望的な「非一貫性」を、もっとも純粋なかたちで示すがゆえに、目障りで片付けてしまいたいものであるにすぎない。

作品の終盤にレンツは村を去ることになるが、彼の鋭敏さは極点に達し、有名な台詞を口にする、「本当にあなたには何も聞こえませんか？この地平線を巡り叫び声をあげるも、たいていは静けさとして片付けられるような、恐ろしい声が聞こえませんか？」、静寂は誰にも聞きとられない無数の叫び声の集積だ、というレンツの暴露は、何事かを感じつつ、それでいて断念を強いられる人間にとって、たとえそれに慣れてはいても、決して忘れて済まされるものではない。

『レンツ』の邦訳については、『ヴォイツェク ダントンの死 レンツ』岩淵達治訳 岩波文庫があります。原書で読むには、*Lenz. Text und Kommentar Suhrkamp Basis Bibliothek* が便利です、丁寧な注や作品の情報についても幅広く記載されていて、作品を読みこむことができます。

『失踪者』（アメリカ）／フランツ・カフカ

建築現場では足場の棒が高く、青空に向かってそびえていた

「十七歳の少年カール・ロスマンは、女中に誘惑されて子供ができてしまったために、貧しい両親によってアメリカにやられた。減速した船がニューヨーク港に入港したとき、彼は、もう長いこと眺めていた自由の女神が突然強くなった日差しを受けるさまを見つめていた。」カフカ（Franz Kafka 1883-1924）の最初の長編小説（1912）は、このような書き出しから始まる。身一つでアメリカにやってきたロスマン少年は、運よく、アメリカで成功して実業家となったおじと出会う。しばらくはおじのもとで暮らし、そこで英語を習い、順調な生活が続いているかのようなだった。しかし、ひょんなことがきっかけでおじのもとを追い出され、安宿で出会った二人のゴロツキ、アイルランド人のロビンソンとフランス人のドラマルシュとの放浪が始まる。

この小説、カフカの作品の中ではちょっと異色だ。主人公はテンポよく移動していくし、それとともに社会の様々な側面を捉えていく。ソシアルスティックなのに、それでいてどこか奇妙だ。ロスマン少年が見た自由の女神が手にしているのは松明ではなく、剣である。

（カフカの勘違いではない。）彼は、行く先々で追い出され、不当な扱いを受ける。彼も、

彼を取り巻く人々も、悲惨で救いがたい境遇にある。表題代わりに掲げた一文は、ロスマン少年がホテル・オキシデンタルというところで働いているときに会った十八歳の少女テレゼが語った、五歳のころ母親が死んだときの光景である（一部表現を改めた）。ニューヨークのスラムにある現場で、足場の棒によってぽっかりと切り取られた空間の上に広がる青空を、五歳の少女は眺めている。その建築現場では母親が働いているのだが、それから間もなく事故死する様子を、彼女は目撃することになる。テレゼは、空にそびえる足場の光景を、目に涙を浮かべながら語る。それにしても、この叙情性は何なのだろう？ 全くドライな筆致なのに、それでいてこんなにもみずみずしくさわやかなのだ。ロスマンもまた、感傷のかけらもなく突き進む。フランスの映画監督ストロブ＝ユイレ夫妻は、この小説を 1983-84 年に映画化した際に「階級関係」(Klassenverhältnisse) という題をつけた。たしかに、小説では船内の場面以来、さまざまな階級関係が描かれていて、この題はそれを的確に捉えている。だが、まるでそれをはぐらかすように、この小説は何もかもが不思議な終わり方をする。

長い間この作品は『アメリカ』というタイトルがつけられていた。それが、カフカの手書きの原稿を詳しく検討して、新しい編集の全集が刊行され、『失踪者』として生まれ変わった。もともとは未完成の小説である。それを反映した編集方針となった。『失踪者』の翻訳としては、池内紀訳が白水社から出ていて 1200 円ほどで買える。

カフカを世界的に有名にしたのが戦後の実存主義の作家たちだったため、一般的にはまだそのイメージが強いのかもしれない。しかし、孤独、不安、絶望といった言葉だけでカフカは語れない。カフカにはいろいろな切り口があり、ベンヤミンからデリダまで多くの思想家や哲学者が語ってきた。モチーフも探ればいろいろと出てくる。以前、独文科の教授をなさっていた平野嘉彦氏の『カフカ 身体のトポス』(講談社)は、入門書として優れていて、私もよく参考にした。しかしこれとて、カフカの一つの読解例でしかない。この研究の多様さが、カフカの文学の豊穡さを証明している。

『ファウスト』／J.W.ゲーテ

シューベルトが作曲した「魔王」を聞いてゲーテが「怖すぎる」とコメントを残したという話を聞いたことがある。馬のひづめの音や旋律の違いによる魔王や子供、父親役の描写など、現在では歌抜きで演奏されることもしばしばあるように、歌詞がなくとも夜中に馬を走らせる疾走感や、魔王のおどろおどろしさはありありと浮かんでくる。ことばによってつむがれる“詩”を重んじたゲーテにとっては、物語が言葉の音ではない、描写的な音楽により語られてしまうことを好むことができなかったのだろう。それでもシューベルトは、その 31 年という短い生涯の中でゲーテの作品から多くの歌曲を書いた。ゲーテが晩年までその熱意を傾けた『ファウスト』も例外ではない。シューベルトによって有名な「糸を紡ぐグレートヒェン」のほか、ファウストのさまざまな場面の歌曲が遺されている。

『ファウスト』は民間伝承「ファウスト博士」を下敷きにして作られた。学者としてまじめすぎるほどに学問に精を出し、真理を追究し続け、常に満たされることのない年長いたファウスト。彼は悪魔メフィストフェレスとの賭けにより、市街や魔女の山、神話の世界をめぐる。その中でファウストは、欲望、恋愛、その結果としての悲劇、政治に

おける偉業など人間の“人生”そのものを味わうこととなる…グレートヒェン悲劇を中心とした第1部と、ギリシア神話の世界に入り込んだり、ファウストが皇帝に仕えたりする第2部から成り、ゲーテは着手してから60年もの歳月を掛けてこの作品を完成させた。

さて、話は翻って、シューベルトに戻ろう。鑑賞者をその出来事に入り込ませてしまうような音楽を書いたシューベルトの音楽も、もとは『ファウスト』というゲーテによって書かれた“ことば”で紡がれた物語に触発されたものだ。言葉の韻やリズムに現れ出る登場人物のキャラクター。白と黒の紙の上の言葉が紡ぎだす物語が、色とりどりの人間模様を頭の中に浮かび上がらせてくる。ファウストを題材にした歌曲や楽曲は非常に多い。しかし作品中の同じモチーフであっても、作曲者が違えばそこに描かれる物語はまったく異なる印象を持つ。それぞれの作曲家がゲーテの言葉から読み取る物語がそれぞれ異なるのだ。これが言葉の力だろう。白黒の言葉が私たちの中に入ってきて、今までの経験や思い出などと絡み合いながら、自分だけの物語を見せてくれる。

以下にはファウストをモチーフにしたいくつかの音楽作品を紹介しようと思う。聞き比べながら作品を読み進めるのもきっと楽しい。自分の物語世界は決してそれだけで完結しているものではない。ほかの物語と共鳴しながら、それは自分の中でどんどんと変化していくはずだ。

シューベルト 「糸を紡ぐグレートヒェン」「トゥーレの王」

シューマン「ファウストからの情景」

シャルル・グノー オペラ「ファウスト」

『闇の子午線』／生野幸吉 『ツェラーンもしくは狂気のフローラ』／平野嘉彦

アウシュビッツ以後 詩を書くのは野蛮だ というアドルノのことばのあと、それでもなおわたしたちの記憶に残る詩を書いた男がいる。パウル・ツェラン。ルーマニアの町にユダヤ人として生まれ、父母を強制収容所で失った詩人。無数の視的イメージを孕みながら、常に死の香りをまとっている詩作。彼の詩は第二次世界大戦においてドイツが行ったことにたいする告発であると同時に、さらには詩人自らの存在を問う行為でもある。ハイデガーの著作にも影響を受けたと言われているツェランは、ハイデガーを彼のシュバルツバルトの小屋に訪ねたことがあるが、その対面は決して友好的なものにはならなかったという。謎かけのような言葉の数々にあなたはなにを読みますか？自身も詩人であった生野幸吉先生の『闇の子午線』や、植物に博識であったツェランに焦点を当てた平野嘉彦先生の『ツェラーンもしくは狂気のフローラ』は、ツェランの詩を読むひとつの道しるべとなるかもしれせん。

カリガリ博士 Das Cabinet des Dr. Caligari. (1920 公開)

ヒッチコックも手本にしたという言わずと知れた名作。谷崎潤一郎や竹久夢二も見たいらしい。映画は主人公フランシスの回想から始まる。とある町の見世物小屋で予言の見世物をする医者カリガリ博士と彼の患者である、夢遊病者チェザーレ。彼らから明日が寿命と告げられた町の住人や役人が次々と死んでゆく。不審に思ったフランシスは真相をつ

かもうとするが…白黒の画面に登場するゆがんだ舞台美術はドイツ表現主義の画家たちが作り上げたもの。サイレント映画だけに音響の効果もすばらしい。残念ながら字幕は英語なのでドイツ語の勉強にはならないのが残念。最後のどんでん返しには思わずうなってしまうこと間違いなし。

ベルリン・天使の詩 Der Himmel über Berlin (1987 公開)

公開年が自分の生まれた年というだけでもなんとなく運命を感じてしまう。と言うとなんだか大げさに聞こえるのだけど、私が生涯一番初めに見た映画で、一番好きな映画のひとつ。東西分裂のさなかに作られた、フランスと西ドイツの合作。舞台は東西が「壁」で隔たれたベルリン。サーカスの舞子に恋をして、永遠の命を捨て人間になることを望み、ベルリンへ降り立った天使ダミエル。映画が公開された2年後、ベルリンの壁は崩壊を迎えた。天使ダミエルを演じるのは『ヒトラー 最後の12日間』でアドルフ・ヒトラー役を演じたブルーノ・ガンツ。脚本は監督ヴィム・ヴェンダースとペーター・ハントケ。ヴィム・ヴェンダースの妻ドナータ・ヴェンダースは写真家で、数年前日本でも合同の個展が開かれた。同監督作品だと『ペーパームーン』を髣髴とさせる『都会のアリス』もおすすめ。

ラン・ローラ・ラン Lola rennt (1998 公開)

20分で10万マルクを用意する。そんな無謀な目的のために恋人のためにベルリンをひたすら走りぬけるヒロインのローラ。銀行に勤める父親に頼んだり、スーパーで強盗をしたり、警察に追われたり、“はたまた”ラストはハッピーエンドで終わる。途中でアニメが導入されたりと、映像にも工夫が多数ある。

二人のロッテ Das doppelte Lottchen (1993 公開)

親の離婚が原因で生き別れとなった双子。偶然サマースクールで出会った二人は、休暇中の入れ替え作戦を結構する。不良と優等生と、顔は同じでも性格も風貌も異なる二人が、なんとか自分の片割れを演じている姿は微笑ましい。ケストナー原作を現代風にアレンジした作品。心温まる。

善き人のためのソナタ Das Leben der Anderen (2006 公開)

壁崩壊を4年後に控えた東ベルリン。社会主義体制下の監視社会。シュタージで冷徹に任務を行う主人公は、反体制の疑いをかけられた劇作家を監視することとなる。「守られるべき体制」の下で、個人の思惑、欲望、成功への意志、芸術家としての信念、愛、異なる生き方への気付き、が絡み合い物語は進んでいく。

グッバイ、レーニン！ Good Bye Lenin! （2002 公開）

父の西ドイツ亡命が失敗して以来、社会主義に傾倒する母を持つ主人公のアレックス。しかし、デモに参加する彼を目撃した母はショックのため昏睡状態に陥ってしまう・・・東西ドイツ統一後、あらゆる手段で母親にそのことを悟らせまいとする主人公の姿が、こっけいでもあるが健気で胸が熱くなる。主演のダニエル・ブリュールの出た映画では『ベルリン 僕らの革命 Die Fetten Jahre sind vorbei』や『青い棘』などがある。『ベルリン…』では、資本主義に抗う運動をする主人公たちと、かつてやはり「68 年世代」として学生運動に明け暮れ、今は富豪となった男とが、衝突と葛藤の末に互いを理解しあい、それぞれ生き方を見つめなおすまでが爽やかに描かれている。

ヒトラー 最期の 12 日間 Der Untergang （2004 公開）

第二次世界大戦末期、ドイツ降伏の直前。迫りくる連合軍脅かされながら、地下豪でヒトラーとその側近たちが過ごした最期の 12 日間、およびヒトラー自決後の様子を描いた。これまで映画の中でヒトラー役の役者が顔をすっかり出して演技をするということが珍しかった中、ブルーノ・ガンツがヒトラー役を好演。非常に見ごたえがある。実際にヒトラーの秘書をしていた女性の記述が元になっており、映画エピローグにおいて本人のインタビューも添えられている。

アイズ・ワイド・シャット Eyes Wide Shut （1999 公開）

原作はシュニッツラーの『夢奇譚』。キューブリックの遺作であり、トム・クルーズとニコール・キッドマンの夫婦競演が話題になった。結婚 9 年目にして倦怠期を迎えた夫婦。自分自身の妄想、そして相手に対する妄想を抱えながら、主人公は奇妙な事件（事故）に巻き込まれていく。最期に夫婦を待ち受けているものは…個人的には映像化されたものよりも小説のほうが好き。『夢奇譚』は池田香代子訳で翻訳も出ているのでそちらをどうぞ。

愛を読むひと THE READER （2008 公開）

ベルンハルト・シュリンクの原作『朗読者』も話題になったのでご記憶の方も多いだらう（この小説の翻訳者、松永美穂先生は東大独文出身です）。